

Living the

New Year's Issue
2020

LOTUS

Buddhism in Everyday Life

年頭法話

じんじょう
尋常 (つね日ごろをたずねる)

立正佼成会会長 庭野 日鏡



WCRPが創設から五十年の節目
開祖さまの願いを顧み、深い感慨

「令和」の時代に入り、初めての新年を迎えました。それぞれ、心に期すものがあるのではないかと思います。

昨年は、台風十五号、十九号などの自然災害が相次ぎ、多くの方々が犠牲になりました。家屋や農地に被害を受けた方、停電や断水によって不便な生活を強いられた方、いまだに生活再建のめどが立たない人も大勢おられます。改めてご冥福をお祈りし、お見舞いを申し上げます。

日本は、自然災害が多発する国です。一人ひとりが、これまでの経験を生かし、万一に備える知恵を身につけることが不可欠であると思います。自助(防災用品を揃えたり、地域の危険度を調べたりすること)、共助(身近な人同士が助け合うこと)の両方を大切に、被害を最小限にとどめる取り組みを積み重ねたいものです。

特に最近の自然災害は、世界的な地球温暖化の影

響を受けて深刻化しています。こうした気候変動は、人間の活動によって引き起こされている可能性が極めて高いといわれています。日本は、豊かさの中で、過剰生産、過剰消費・廃棄を続けてきました。これまでの価値観を大きく見直す転換点を迎えていると思います。

一方、昨年は、ドイツでWCRP(世界宗教者平和会議)の十回目となる世界大会が開かれました。そして本年、WCRPは創設から五十年の節目を迎えます。WCRPの創設と発展は、開祖さまの大きな願いでした。その歩みが半世紀もの時を経たことに深い感慨を覚えます。

今大会は、ドイツ外務省の受け入れ、協力によって行われました。宗教者に限られた世界大会ではなく、年々、各国の政府、国連などとの連携が強まり、広がりを見せています。開祖さまはじめ、多くの先達の方々も、きっと喜んでおられるに違いありません。

世界大会の期間中には、大聖堂はじめ、全国の各教会で、会員の皆さまが祈願供養をしてくださいました。私自身、皆さまの思いを胸に、世界大会に臨ませて頂きました。

平和を実現するには、国際的かつ専門的な議論や活動が必要なことは事実です。しかし根本は、それぞれの国や地域、家庭に平和を築くことです。それ

にはまず家庭の中で、宗教に基づく平和な心、人間性を養っていかなければなりません。日々の信仰生活が、平和に直結していることを、いま一度、確認し合いたいものです。

さらに今年七、八月には、二度目の東京オリンピックが開かれ、海外から大勢の人々が来日します。東京はもちろんのこと、全国各地を訪れる外国人の旅行者数は、年間で三千万人とも、四千万人とも言われています。そうした方々に、日本の良さをお伝えできるよう、明るく、優しく、温かい心で触れ合い、できる限りのお手伝いをさせて頂きましょう。

自分の居る所すべてが「即是道場」 朝夕行なっていることが、そのまま仏道

さて私は、「令和二年次の方針」を次のようにお示しました。

天地自然は、一瞬もとどまることなく、創造、変化を繰り返しています。私たちもまた、天地の道理の如く、停滞することなく、何事に対しても、日々新たな気持ちで取り組んでいくことが大切です。

今年、本会は創立八十二周年を迎えました。その今日に及ぶ歴史の礎は、開祖さま、脇祖さまをはじめ、先輩の幹部の皆様、信者さんの寝食を惜しまぬご尽力によって築かれてきたものです。

私たちは今後、教団創立百年に向けて、一人ひとりが、「即是道場」(この処は即ち是れ道場なり)の精神をもって、そのご恩に報いてまいりたいと思います。



年次ごとの「方針」は、^{しんとう}浸透することを願って、三年間は、ほぼ同様の内容としています。今年は、一部を新たにし、『「即是道場」（この処は即ち是れ道場なり）の精神』という言葉を加えました。

これは、皆さまもご^{ぞんじ}存知のように、青経巻の最初に出てくる「道場観」の一節です。

「道場」というと、私たちはまず大聖堂や教会、地域道場などを思い浮かべます。しかし、「即是道場」とは、自分が^い居る所、住んでいる所、身を置く所、すべてが道場であるということです。

よく^{すもう}相撲に^{たと}譬えてお話しするのですが、教会や地域道場は、いわば^{けいこば}稽古場といえます。本場所は、あくまで家庭や職場、学校、地域社会です。

日々の生活の中では、本当にいろいろなことが起こります。自己中心の人もいますから、お互いが理解し合い、仲良くしていくのは、^{なみたいてい}並大抵のことではありません。

相性の悪い人に出会ったり、冷たい言葉、厳しい言葉を投げかけられたり、無視されたりして、悲しく、つらい思いをすることもありますが、

しかし人間は、不自由であったり、不都合であったりするからこそ、それを何とか乗り越えていこうという気持ちを起こします。何一つ試練がなかったとしたら、おそらく人間は向上できないと思います。

ですから、^{であ}困難に出遭った時には、「人間として成長するきっかけを頂いた」「ここが踏ん張りどころだ」という受け取り方をして、目の前のことに最善を尽くしていく——それが「即是道場」の精神であります。

とりわけ在家仏教徒にとっては、日常生活のあらゆることが修行です。何か特別なことをするの

ではなく、人と会って話をすること、仕事をする事、学校生活を送ること、料理や掃除をすること……。その一つひとつのことに、手を抜かず、^{ていねい}丁寧に、心を込めて取り組んでいくことで、良い習慣が身につき、^{おの}自ずと^{ととの}身心が調うのです。

特に家庭は、最も甘えやわがままの出やすい場所です。親しい関係であるがゆえに、遠慮のない、きつい言葉が飛び交うこともあるでしょう。そうした中で、感情を抑え、私心を捨てて、仏の教えに沿って実践していくことは、何にも^{まさ}勝る厳しい修行です。家庭こそは、「人間形成の根本道場」なのです。

江戸時代初期の^{りんざいしゅう}臨済宗の^{そうりょ}僧侶である^{し どうぶ なんぜん}至道無難禅師が、次のような^{どうか}道歌を^{のこ}遺されています。

道という言葉に迷うことなかれ 朝夕^{おの}己が^な為すわざと知れ

仏道と言うと、大変立派で^{なんかい}難解なことのよう聞こえるが、そんな言葉に迷ってはならない。あなたが朝夕行っていることが、そのまま仏道であることを知りなさい、という意味合いです。この道歌は、「即是道場」の精神を、よく言い表していると思います。



自分より先に人さまを救いたいと 思う心は、本来、誰にも具わっている

では、具体的にどうすることが仏の教えに^{かな}適うことなのでしょう。

本会は、法華経を所依の経典としています。そして、法華経の教えの中心は、「菩薩行」です。

自分が悟りを得たいのと同時に、他の人々をも救いたいという心を起こした人が「菩薩」です。その心をどこにおいても忘れずに精進することが「菩薩行」であります。身近な言葉で表現すれば、仏の教えを学び、身につけて、慈しみ思いやる心を^{いつく}発揮^{はつき}することです。

「自ら未だ^{みづか}度^{いま}ることを得^{わた}ざるに先^まず他^{わた}を度^{わた}す」という言葉があります。自分が悟ろうとするよりも先に、他の人々に悟ってもらうような願いを抱いて実践しなさいということです。このことが、菩薩行の尊いところとされています。

私たちは、まず自分が救われないと、人さまを救うことができないと考えがちです。自分のことで精いっぱい、他の人のことなど考えられないという人もいるかもしれません。

しかし、自分より先に人さまを救いたいと思う心は、大変な修行を積まなければ得られない心の働きではなく、本来、誰にも^{そな}具わっている心です。

自分自身が迷ったり、悩んだりしていると、他の人の苦しみ、悲しみがよく分かり、深く共感できます。「本当に気の毒だ」「何とかしてあげたい」という気持ちが自然と湧き起こります。そして、自分のことは後回しにして、手を差し伸べるのです。

特に母親は、子供が川に落ちたとしたなら、自分が泳げようと泳げまいと、まず川に飛び込むに違い

ありません。常識的には「泳げないなら助けられない」と考えるはずですが、わが子を救いたい一心で、川に身を投じるのです。

そもそも人間は、一人ひとり表面的には異なりませんが、心の奥底^{おくそこ}にある本性^{ほんしょう}は、一つです。誰もが、「生き甲斐^{が い}のある人生を送りたい」「幸せになりたい」と願っています。そして、いがみ合っただけでいいのではなく、みんなと仲良くしたいと心から望んでいます。

ただそのことは、漫然^{まんぜん}と暮らしていたのでは実現しません。だからこそ私たちは、仏の教えを正しく会得^{えとく}し、それを自分の日常生活と照らし合わせて考え、このことを絶えず繰り返すことを生き方の基本としているのです。

仏道には限りがなく、これで終わりということはありません。少しは分かったような気持ちになっても、何かあると、自己中心的な心が現れて、腹を立てたり、言い返したりしてしまいます。その都度、反省し、自分を見つめ直し、新たな気持ちを起こして、毎日毎日、一瞬一瞬を大事に生きていく。それが、私たちの精進といえるでしょう。

「即是道場」——生きていくことそのものが修行であるという自覚を持って、今年も一所懸命、精進してまいりましょう。

(『佼成新聞』 令和2年1月5日号より)

